

2020年度 ソニー幼児教育支援プログラム

虫のようにしなやかに
野草のようにたくましい心を育てる
～のっばらプロジェクトの取り組み～



世田谷区立 希望丘保育園

目 次

はじめに	1 ページ
1. のっばらプロジェクトについて	
(1) 科学する心の芽生え	
(2) のっばらのはじまり	
2. 虫の収集と発見の喜び	2 ページ
事例 1 : 初めての出会い	
事例 2 : 「なんでも図鑑」の取り組み	
事例 3 : 発見を伝えたい	
3. 増していく虫への興味と関心の高まり	8 ページ
事例 1 : ハリガネムシっておもしろい	
事例 2 : カマキリとの 1 年	
4. 関心から探求心の芽生えへ	12 ページ
事例 : イモムシの不思議	
5. 興味と関心の継続	15 ページ
カブトムシの飼育	
6. まとめ	17 ページ
7. 今後の課題と方向性	18 ページ
おわりに	
あとがき ～保育士の視点から～	

はじめに

「科学する心」とはどういうものだろうか。初めてのことに会い、驚き、好奇心にかられて夢中になることだろうか。あるいは実際に自分の手で触れてみて何かを感じ、試行錯誤してみることだろうか。それらはすべて、直接体験を通して育まれる「科学する心」と、私たちは考える。

近年、都市部では園庭を保有していない保育園が数多くあり、自然とのかかわりは薄い。それらの保育園は近くの公園を園庭代わりに利用しているが、公園もまた固定遊具が多く配置され、自然に接することができる場所は消えつつある。また園庭があったとしても、そこに子ども達が自由に摘んで楽しめる野草や花はわずかであり、日常的に生き物が園庭に姿を見せることも極めて少なくなった。それ故に、子ども達が主体的に自然と触れ合う機会がほとんどないというのが現状である。

このような都会の保育園の中でも、子ども達が自然や四季の変化を感じながら、自由に虫探しができる環境をつくりたい、色々な草花に触れ、たくさんの生き物に出会いながら、心が動く体験を存分にしてほしいという職員共通の思いがあった。

そこで本園でスタートさせたのが「のっばらプロジェクト」である。

「のっばらプロジェクト」とは、園庭の一角に「のっばら」を作り、そこへ様々な野草を根づかせ、多くの虫を呼び込む試みである。さらに園庭の柵沿いには、「自然保護区」として人が立ち入れない虫の生育スペースを作ることにした。保育園の園庭の一角に作られた「のっばら」は、最初はまだ丸太の枠と土しかないただのスペースであった。その何もないスペースから自然に近い環境を作ろうと試行錯誤して進められたプロジェクトである。

1. のっばらプロジェクトについて

（1）科学する心の芽生え

「のっばら」がどのように育っていくか、また子ども達が「のっばら」を通して日々何と出会い、何を感じるのか、そしてどんな反応を見せるのかは保育士にとっても想像しづらい点であった。しかし手探りの中でも、一人ひとりの子ども達をよく観察し、子ども達が感じる「これは一体なんだろう？」というわくわくした気持ちや「また明日も出会いたい、やってみたい」という湧き上がる思いに寄り添っていくことが大切だと考えた。保育士が子どもの思いに気づいたとき、どのように共感し見守っていくか、さらにどのような環境を提供し援助していけばいいのかを丁寧に考えながら進めていくことにした。

この「のっばらプロジェクト」では、子どもと「のっばら」のかかわりを取り上げ、子ども達のなかにどのように「科学する心」が芽生え、どのように子ども達のなかで広がっていくか、また、保育士がそれに関わることでどのように深まっていくかを探っていくこととした。

（２）のっばらのはじまり

まず、５歳児クラスの子ども達とのっばら作りについて相談する機会を持った。最初子ども達は、のっばらというイメージが湧かない様子であった。のっばらは、虫のたくさん集まる場所、虫探しができる場所、草や花を使ってままごともしめるかもしれないということを具体的に伝える。すると、「草もちぎって使っているの？」「お花のケーキを作りたい」との声があがる。次にどのようにのっばらを作っていくか、保育士が子ども達になげかける。すると、「種を植える」「虫はどこから捕ってきてのっばらにいれようよ」との声があがった。そこで近くの自然の多い公園に散歩にかけ、虫をそれぞれ捕まえてくる。虫に興味があり、触ることが得意な子ども達を中心にゲジゲジやミミズを発見し捕まえ、捕まえた子には「すごい」「どうやって見つけたの？」と注目が集まった。捕まえた子は「木の周りを掘ったほうがいい」など、自分なりに見つけたコツを周りの友だちに話していた。園に戻り、ダンゴムシなどの捕まえた虫をのっばらに放す。

しかし翌日、前日に放した虫たちを探すが一匹も見当たらなかった。なぜいなくなったのか、子ども達に問いかけてみると「葉っぱが少なくて隠れるところがない」「餌がない」など子ども達なりに原因を探し、考える姿があった。そこで職員と子ども達と一緒に、虫の好きな野草の種撒きや植えつけを行っていった（写真１）（表１）。すると、ある日テントウムシが一匹のっばらにいる事を子どもが発見する。見つけると真っ先に友だちや保育士に報告し、喜びを共有していた。次第に野草が生い茂り、一面が土だった場所のはのっばらと呼べる緑豊かな場所に変化していった。



写真１ のっばら作り ～土を掘り野草を植える～

表１ 子ども達と植えた野草・蒔いた種とそれにより呼び込もうと考えた生き物

植えた野草・蒔いた種	呼びたい生き物
赤シソ・青シソ・メヒシバ・カラスノエンドウ・シロツメクサ	バッタ・カマキリ・テントウムシ・アブラムシ
ハコベ	シジミチョウ
ノザワナ	モンシロチョウ
ノビル・ニラバナ・ノゲシ・イヌムギ	色々なムシ

２．虫の収集と発見の喜び

のっばらに野草が生い茂ると、様々な虫がやってくるようになり、子ども達は虫探しを日常的に楽しめるようになった。乳児クラスの子ども達も、のっばらへ行けば生き物に出会えるということが分かり、虫や野草に触れるようになった。それにより自然が身近な存在となっていく。４歳児クラスでは、自分達で発見したものを収集する「なんでも図鑑」作りへと活動が発展した。５歳児ク

ラスは、子ども達が発見したものへの喜びや驚きを保護者と共有するため、「インスタグラム」を模した「のっばらグラム」を発信した。さらにそれは園全体の取り組みへと発展していった。

以下、乳児、4歳児、5歳児の事例を取り上げる。

事例1 初めての出会い

① テントウムシ見つけた 2020年3月 0歳児クラス

園庭に出るとテントウムシがいるかとAがのっばらに探しに来る。のっばらで何度も虫と出会っているので、“虫は友だち”と思っているようだ。Aは葉っぱの上のテントウムシを指で捕まえて、つぶれないように手の中に包んだ。そのうちテントウムシの中央部に薄茶色のものを発見した。それは後翅であったが、Aはゴミが付いていると思ったのか優しく取ると、また手に包んで先ほどの葉にそっと戻した。そこにHが来る。Aが、テントウムシがいることを指差して知らせると、Hは指で摘み、今度は2人で一緒に見る。しばらくしてAが手を振って葉に乗せてあげて、というような仕草をするとHはそれを理解したのか、葉の所にテントウムシを放した。



その後、Hは一人でテントウムシを再び手に捕り、摘み方を何度も変えていた。よく見えるようにつまみ方を試しているようだ。そのうち指でテントウムシの中央を押すと、その丸い背中が潰れて翅が右左に割れる。Hはじっと観てから前翅を両方向に引っ張ったため、片翅が取れてしまった。Hは気にもとめず、テントウムシを手放して別の遊びへと離れて行った。

② アブラムシ捕まえた 2020年4月 2歳児クラス

そら豆にたくさんのアブラムシがいるのをGが発見する。指先で小さなアブラムシを摘まんで捕まえようとした。しかし、何度捕まえてもつぶれてしまっている。最初はそのことに気づいていない様子で、指で捕まえることを繰り返していた。しばらくしてGは自分の指を見て、アブラムシがつぶれて動かなくなっていることに気づき、複雑な表情を見せた。そして、保育士を見て「できない」と伝えてくる。そこで保育士と一緒にそら豆の葉を揺らし、掌に落とす方法を伝えてみた。Gも同様にすると、大量のアブラムシがGの掌に落ちてきたので驚いた顔を見せた。そして、自分の手を色々な方向に動かしたり振ってみたりしながら、掌でアブラムシが動く様子をひとしきり見た後、手を強く振ってアブラムシが落ちていなくなる様子を観察していた。

考察

乳児クラスにとって、虫は興味の対象で見つけると触りたいものである。手にすると初めは動く不思議なものとして興味を持つ。それからそっと持ってみたり、葉っぱに返してあげたり、どうやって動くのかなど、その様子を見ていろいろな感情が動き、虫に触れることを楽しむようになっている。この嬉しさを保育士に見守ってもらい、友だちと共感することでまた明日も出会ってみたいという気持ちが湧いてくるのだと思う。虫や野草を身近な存在として普段からじっくり観

るなかで、新たな発見をし、自分なりに試す。自然を五感で捉え観察して“なんだろう”という不思議を見つける。その一つひとつの体験が乳児期の小さな科学の芽を育てていると言えるだろう。

事例2 「なんでも図鑑」の取り組み 4歳児クラス

① 「なんでも図鑑」を作っていたい（2019年8月）

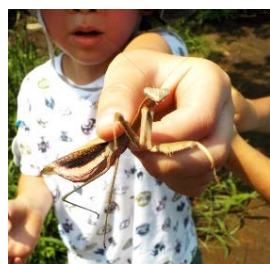
バケツや虫かごに捕まえた虫をたくさん入れて集めることを楽しんでいた子ども達だったが、遊びの時間が終わるたびに捕まえた虫を放すことが残念そうだった。

ある時、保育室にあった虫の図鑑に、自分たちで虫図鑑を作っている子どもの様子が記載されていることに気づき「僕たちもこういうの作りたいなあ」と子ども達がつぶやく。そこで、捕まえた虫をのっばらに放す前に写真を撮ることにし、それを紙に貼って集め図鑑を作ることにした。子ども達の意見を取り入れながら、「虫の名前」「捕まえた日」「誰が捕まえたか」「どこで捕まえたか」などを記載することとした（写真2）。

はじめは虫を図鑑に載せることが中心であったが、クラスの中には虫に興味がない子もいた。そこで対象を虫に限定せず、子ども達の気づき・発見を記録する「なんでも図鑑」とした（表2）。すると子ども達は「虫」「花」「葉っぱ」「木の実」「木」「地面に空いた謎の穴」など、様々なものの発見を楽しむようになり、のっばらで過ごす子ども達がますます生き生きとしてきた。



トンボ



カマキリ



アゲハチョウ



ショウリョウバッタ

② 捕まえてあげる！（2019年10月）

Rは虫があまり得意ではなく、草や花などの自然物を見つけて図鑑に載せていた。しかし、周りの友だちの様子を見てある日、虫を捕まえることに挑戦することにしたようだった。のっばらでシジミチョウを発見し、捕まえようとしながらも自分の手で捕まえるのを躊躇していた。すると5歳児Nがそれに気づき、「私が捕まえてあげる！」と代わりにシジミチョウを手で捕まえてくれた。「なんでも図鑑」に載せられたシジミチョウのページには、「誰が捕まえたか」として二人の名前が記されることになり、Nは誇らしげにそのページを眺め、RはNへのあこがれの気持ちが高

まった。それをきっかけにRは虫を捕まえるようになり、シジミチョウも自分の手で捕まえることができるようになった。

③ 虫の名前をもっと知りたい（2019年 11月）

虫を捕まえると、何の虫か調べるために虫メガネや図鑑を使って情報を得ようとする姿が見られるようになった。しかし、捕まえたものの、名前が分からず「謎の虫」として「なんでも図鑑」に載せるケースもあった。後日「なんでも図鑑」を眺めていた男児が「あ、これ知っているよ」と正確な虫の名前を教えてくれ、情報が更新されることもあった。自分で発見し、捕まえた虫や自然物を載せるという喜びが、もっと知りたいという思いへとつながっていった。



写真2 「なんでも図鑑」

表2 「なんでも図鑑」に載った生き物・植物・自然物とその掲載回数

2019年8月～2020年3月

掲載された生き物	回数	掲載された生き物	回数	掲載された生き物	回数	掲載された生き物	回数
イボバッタ	2	オオカバマダラ	1	クモ	4	アゲハの幼虫	2
ショウリョウバッタ	11	シャチホコガの仲間	1	ケムシ	1	コガネムシの幼虫	1
ショウリョウバッタオス	2	アブラゼミ	1	カタツムリ	5	アオムシ	2
ショウリョウバッタメス	2	カマキリ	8	カタツムリのカラ	1	アオムシ?	1
ショウリョウバッタモドキ	3	ハバヒロカマキリ	1	ハネカクシ	1	幼虫	22
茶色いバッタ	1	トンボ	2	ナメクジ	1	ナゾの虫	9
キリギリス	1	ウスバキトンボ	1	ナメクジの赤ちゃん	1	まるい虫	1
いなご?	1	ツユムシ	1	ナメクジの卵	1	まるっこい虫	1
モンシロチョウ	3	セスジツユムシ?	1	カメムシ	5	ナゾの水色虫	1
ベニシジミ	2	ツユムシの仲間	1	ミミズ	6	緑色のヘンな虫	1
ヤマトシジミ	4	ナミテントウ	4	マクラギヤスデ	1	ナゾのイモムシ	4
シジミチョウ	8	ナナホシテントウ	4	ハサミムシ	5	こげたイモムシ	1
キタチョウ	1	ダンゴムシ	4	ハサミムシの子ども	1		
黄色いチョウ	2	ゲジ	1	ハサミムシの幼虫	1		

掲載された植物	回数	掲載された植物	回数	掲載された植物	回数	掲載された植物	回数	掲載された自然物	回数
コミカンソウ	1	オクラのカラ	2	ふたばクローバー	1	ナゾのくさ	6	キラキラの貝	1
オヒシバ	1	オクラの種	1	みつばクローバー	3	ナゾの実	1	まき貝	1
イヌタデ	1	パンジー	6	よつばクローバー	3	ナゾの根っこ	1	グリーンの石	1
イヌフグリ	1	たんぽぽ	1	でっかいクローバー	1	へびみたいな根っこ	1	赤い石	1
千日紅	1	マーガレット	1	ねこじゃらし	1	とげ葉っぱ	1	ゴツゴツの石	1
サクラソウ	1	ヤエムグラ	1	みかん	2	紫の葉っぱ	1	欠けた石	1
葉牡丹	1	キンギョソウ？	1	なす	2	こわい顔の葉っぱ	1	霜柱	1
パンジー (おじいちゃんの顔)	1	パンジー (すっぱい顔)	1			ばけダヌキの葉っぱ	1	ナゾの穴	1

考察

虫に興味がない子でも、自分で発見する喜びを大切にしてもらおうと「なんでも図鑑」を始めた。このアイデアにより、図鑑を作成する過程で、自分の発見を嬉しそうに伝える姿や、友だちと一緒に声をかけあい、発見することを楽しむ姿が見られるようになった。虫だけでなく、周りの自然物へと目を向けるようになり、物事への関心が高まった。また、友だち同士で虫の居場所の情報交換をしながら関わりを深め、共感する力が育ってきた。さらに、虫を探し出す力やチョウやトンボを素手で捕まえる時の集中力と瞬発力は目をみはるほどになった。

2019年8月から始まった「なんでも図鑑」は2020年3月で3巻となり、2019年度の1年間で36種の生き物と20種の野草や自然物が掲載された。現在5歳児クラスとなり、現在も更新されている。

事例3 発見を伝えたい 5歳児クラス

① ジグモの巣見つけた！（2019年7月）

園庭で遊んでいた時、とても弱い霧雨が降り出し、またすぐに止んだ。SとHと一緒に遊んでいたが、しばらくすると「先生大変、大発見！すごいから早く見にきて」と、普段聞いたこともない大きな声を出し、のっぴらと畑を区切っている丸太と丸太の間の隙間へ保育士を連れて行った。そこにはキラキラと光る穴のようなものが10cmほど続いていた。

S「見て！地面がキラキラしているの、宝石みたい」

H「ね！すごいね、ダイヤモンドだ。ダイヤモンド！」

保育士「よく、見つけたね。ほんとに宝石だ」

S「私とHちゃんで見つけたんだよね」

保育士「これ、なんだろう、何がキラキラしているのかな？」

一緒に顔を近づけてよく観察してみると、小さいクモの巣のような糸に霧雨の小さな水滴がついてキラキラと輝いているように見えた。

「わあ、宝石みたい」

S「これ何かの糸？」

H「クモの巣じゃない？」



S「でも、クモいないよね。雨が降って濡れるからいないんじゃない？」

保育士「さっき弱い雨が降っていたからそれが糸にくっついたんだね」

S「じゃあ強い雨が降ったらなくなっちゃうかな。やだなあ」

と話している。その時、Hがカメラで撮っておくことを思いつき、写真に残す。

翌日、Sは園庭に出ると真っ先にクモの巣を見に行くが、クモの巣はなくなっていた。残念そうにしつつも「撮った写真をみんなに見せよう」と言う。Sがみんなに写真を説明する時間をつくり、どこで、いつ見つけたかなどを発表した。写真を見た子ども達は「すごく綺麗!」「いいな、俺も宝石みつきたい」と喜び、さっそく園庭にでてSを中心に宝石探しが始まる。すると他のクラスの保育士が、宝石は地面に巣を作るジグモの巣ではないかと言う。宝石探しをしていた子ども達は「土に巣を作るクモがいるの?」と驚き、先日の場所でジグモを探し始める。すると、Sと2人の女兒が畑の土に1cmほどの小さなクモの巣がいくつもあることに気づく。そしてさらに地面を探していると2mmほどの小さな茶色いクモが何匹も土の上を歩いているのを発見した。

S「赤ちゃんだから巣もこんなに小さいのかな、この前の宝石の巣はもっと大きかったもん」

R「もしかしてこの子達のお母さんの巣だったんじゃない?」と2人で話していた。

考察

子どもの伝えようとする気持ちや発見したことを聞き逃さず、1つ1つ丁寧に受け止めて共感していくことが子どもの更なる好奇心へとつながっていくのだと感じた。また5歳児は自分の思いを友だちに伝える、伝えられることでお互いに共感刺激しあって、クラス全体へと関心が広がっていく。共有する時間、場所をどのように設定していくかが大切だと感じた。

今回の事例では、Sが写真を自分の母にも見せたいと言ったため、保護者お知らせ用ボードに張り付けた。「私が見つけたって言ったら綺麗って言っていたよ」と嬉しそうに話してくれた。この保護者用お知らせボードは「のっぽらグラム」と名付け、子どもと「のっぽら」に関する子どもの発見、つぶやきをタイムリーに発信する機会としてエントランスに設置し、年間45回発信した(写真3)。

またA4サイズ両面にのっぽらのできごとを報告した「のっぽらだより」を保護者へ配布した(写真4)。これは、子どもの育ちを保護者と共有するためのツールとなった。



写真3 「のっぽらグラムボード」



写真4

2019年7月発行「のっぽらだより」

3. 増していく虫への興味と関心の高まり

虫とのかかわりが日常的になると、生き物に詳しい子ども達が出てきたり、その子ども達に影響されて興味を持つ子ども達も増えてきた。好奇心から色々な疑問を湧かせて生き物とかかわるようになっていった。また、幼児クラスの子供達は虫をつかまえる度に虫メガネで虫の足や顔、フンなどを観察する姿が増し、さらに関心が深まっていった。しかし虫メガネは倍率に限りがあった。もっと精度の高いものを利用して子ども達の好奇心を広げ、発見する面白さを感じてほしい、また見たものを友だちと共有してほしいという思いで、デジタル顕微鏡を購入した。以下、それぞれ事例としてまとめた。

事例1 ハリガネムシって面白い 2歳児クラス

ナゾの生き物（2019年6月）

のっばらでいつものように虫探しをしているとSが「何か動いてる！」と細長い針金のような形でゆっくりと動く生き物を発見する。その声に子ども達が集まってきて「ミミズじゃない？」「草？」「根っこ？」とみんなで考えていた。すると4歳児が「これはハリガネムシだと思う」と言う。子どもも保育士も聞いたことのない名前に戸惑っていると、続けて「図鑑でみたことがある。カマキリのお腹とかから出てくるんだって」と教えてくれた。2歳児の子ども達は近くにカマキリの死骸を見つけ、自分の目で確認したことで「このカマキリからハリガネムシが出てきたのか？」と4歳児が言っていることが分かったようだった。ハリガネムシという名前がわかり、Rが「触ってみたい」と言う。すぐに用務職員が水の中でも生きられることを調べたが、保育士はハリガネムシがどんな生き物なのか分からなかったため、その時は触らずにペットボトルに水を入れて観察することにした。

翌日保育士が触っても害がないことを確認できたので、子ども達と一緒に触ってみた。子ども達が集まって順々に触り始めると「かたい」「なんかザラザラする」と感触を表現する子がいる一方、触ることを少し怖がる子もいた。しかし、友だちが触っている様子を見て、自分もゆっくりと手を出し、触ることができると、「さわった！」と嬉しそうな表情も見せた。



① 何を食べるのかな？

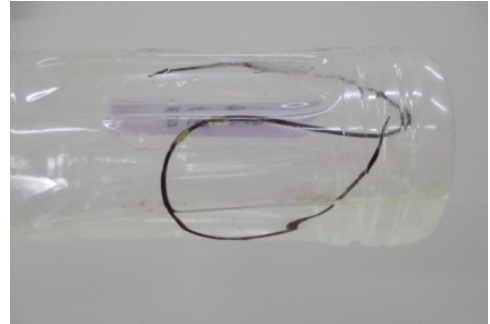
ペットボトルで観察していると「何食べるのかな？」とSが言った。その言葉を聞き、保育士が周りで見ていた子ども達にも問いかけると「葉っぱかな？」「花じゃない？」などと言う。そして葉っぱや草をペットボトルに入れてみるようになった。しかし草を食べる様子はなく、時間がたってもほとんど動かなかった。「食べてないね」と少し残念そうにしていたが、「じゃあカマキリかな？」「パンを食べるかな？」と次々に考えてみる。翌日、用務職員から「鯉節や金魚の餌を入れてみたらどうか」という提案があり、早速入れてみると、直接食べる姿は見られなかった。しかし、ハリガネムシが少し動いたのをみて「なんか動くようになったね」と子どもが気づく。「もしかしたら食べた

り水を飲んだりしているかもしれないね」と話すと、子ども達は自分たちがハリガネムシの餌を発見した気持ちになり嬉しそうな表情で「餌をあげたい」と言い出した。翌朝から保育士と一緒に金魚の餌をあげることにした。

② 水を替えてあげたい

金魚の餌をあげるようになって1週間後にFが「水汚いから新しくしたい」と言った。「水を替えようか」と保育士が言うと、子ども達が集まってきた。

「元気になるかな?」「あっ、動いたよ!」「気持ちいいかな?」とみんなで水を替える様子に興味を持って見ていた。その後もしばらくハリガネムシを観察し、さらに興味が増していった。



③ 試したら動いた

ハリガネムシを見つけて2週間。ペットボトルに入っている時、ハリガネムシは縮こまって動かないことがほとんどであった。動くところを見たい子ども達に、初日から興味を持って見ていたRが「こうやったらよく動くよ」とペットボトルを振り始める。すると、縮こまっていた体が伸び、動き始めた。机の上でコロコロ転がしてみた時に、たまたま机から落ちてしまい、そこで形が変わっていたことを発見したようだ。面白くてさらに振ってみると形が変わり、動くような姿があったとのことだった。見ていた子ども達もさっそく試してみると、ハリガネムシが動き、「ほんとだ」「すごい!」と繰り返しやってみていた。Rはその日から「こうやったら（振ったら）動くんだよ」と得意げにハリガネムシを見にきた保育士や友だちに教えるようになった。

考察

今回の経験では、子ども達はハリガネムシに出会い「なんだろう?」「さわってみたい!」と好奇心が湧いた。2歳児は興味を長く保つことは難しい。しかし、ハリガネムシが目で見えて分かりやすい変化や動きをするということが、子ども達の興味を持続させ、子どもの気づきや思いをさらに引き出すことができたと思う。SやRのように興味を持って観察する子がいて、ペットボトルを転がす、振ってみるなど試すことで「ペットボトルを振ったら動く」という発見にもつながった。その疑問や気づきをみんなで共有して一緒に考えていくことで、「何食べるのかな」「水を替えたら元気になるかな」など、2歳児なりに探求心が育まれていった。

事例2 カマキリとの1年 4・5歳児クラス

① カマキリの赤ちゃんだ

2019年5月中旬

5歳児が散歩から持ち帰ったカマキリの卵がかえり、数十匹の赤ちゃんをのっばらに放す。初めて見る赤ちゃんカマキリの動きや速さに驚き、一気に興味を持った。5歳児Aが「すごい動きが速いね」と言いながらよく目を凝らしている。そして草ごとちぎりながら捕まえる。最初はカマキリを触る力加減や扱いもままならない様子で、捕まえては地面に落とすことを繰り返し、やっと手に乗せた。「これ、小さいけどカマキリのままだ」と見入っていた。

② 身体測定をしてみよう

2019年6月初旬

5歳児2人が「またカマキリ見つけた。前より大きくなっているでしょう」と見せに来る。そして虫メガネを手によく見ている。「これは多分ハラビロカマキリだよ、この前図鑑で調べた」と2人が説明している。保育士が定規を持って「大きさを測ってみようか」と提案し、一緒に測った。2cmだった。次の日また2人が「測ってみる」とカマキリを持ってくる。測ってみると2cmに満たなかった。すると、「小さくなっちゃった。じゃあ昨日と違うカマキリだ。また探してみよう」とのっばらへ戻った。日々の計測は小さいクラスにまで広がりを見せ、「自分が見つけて捕まえたカマキリ」という喜びが、日々どのくらい大きくなっていくのかという更なる関心につながった。2cmから始まった計測は9cmまで大きくなり、その様子を写真で掲示していくことで、カマキリの成長を振り返る機会にもなった。



③ バッタを食べた！

2019年9月下旬

のっばらで虫捕りを日常的に楽しみ、この日も捕まえた虫を片っ端から虫かごに入れていた。Sはたくさんのショウリョウバッタを捕まえ虫かごに入れた。そこにMが自分で見つけてきた大きなカマキリを入れた。そして虫かごを置いて満足げに眺めると、再び虫探しへと向かった。

しばらくして戻ってくると虫かごの中を覗き込んでいたSが「大変だ！」と声をあげる。虫かごの中でカマキリがショウリョウバッタを捕まえて頭からバリバリと食べていた。最初は驚いた様子で見ていた子ども達だったが「かわいそう」といった感情的な感想はなく、「カマキリはバッタを食べる」という事実を受け止めていた。

4歳児にとって捕食の様子は「お腹が空いたからごはんを食べる」という生物にとっての当たり前の姿であり、故にカマキリ、バッタのどちらにも思いを寄せることなく、翌日以降も捕まえたカマキリとバッタを同じ虫かごに入れた。



わああー！食べちゃってる

④ 卵を産むかもしれないね

2019年 11月上旬

5歳児3人が枯れた茶色い茎につかまって動かないカマキリを見ている。保育士が「カマキリ生きているのかな」と聞くと、Aが「もうずっとここで動いてないよ、枝になりきっているの。でも死んでないよ、たまに目と足が動くから」と言う。さらにKが「カマキリのお腹が大きくなっているでしょう、卵を産むかもしれない」と言う。そこへ4歳児Mが来てカマキリを見つけ、捕まえようとした。すると3人が慌てて「卵を産むかもしれないから触らないで」と訴えた。秋になり、カマキリが激減したなかで、久しぶりに見つけたカマキリを捕まえたいMは3人の訴えに対してカマキリをよく見たが、「あんまりお腹大きく見えないよ、これはきっとオスだ」と納得しない様子であった。しかし3人が、カマキリの体の動きや変化を指さして口々にMに説明したことが、M

の心に何かひっかかった様子で、Mはカマキリを観察した後、5歳児の意見に従い捕まえることをやめた。

⑤ 卵が産まれた

2019年11月上旬（4日後）

カマキリがお尻から卵を産んでいるのを保育士が見つかる。カマキリは逆さになり、お尻を一定方向に動かしながら卵を産みつけていた。

リアルタイムで卵を産む初めて見る光景に驚き、「うわあ、すごい」とため息のような声があがり、その後沈黙が続いた。そのうち「逆立ちしているね」「カマキリがお尻ふっている」「どんどん泡みたいなのが出て」「泡が卵だね、やわらかそう、クリームみたい」と、友だちと一緒に気づいたことや思ったことを共感していた。

「あーカマキリになってみたい」というつぶやきもあった。産卵の不思議さや初めて見る驚きが、カマキリへの憧れにも似た気持ちにつながり、愛着のようなものを感じられているようであった。



⑥ 誰が食べた？

2019年11月下旬

4歳児2人が穴のあいたカマキリの卵を見ている。保育士が「カマキリの卵が割れちゃったね」と言うと、Hが「そうなの。前から穴があいちゃってたんだよ。穴がどんどん大きくなっちゃった。アリにやられたのかも」と言う。するとKが「寒いからアリはもういないよ。鳥じゃない？鳥って何でも食べるもんね」と答えた。結局結論は出なかった。卵が産まれてからも、子ども達は度々気にして観察を続け、穴の大きさの変化にも気づいていた。年間を通して自然の中で色々な生き物と触れ合ってきたことで、生き物の命が終わってしまうことや、敵に狙われることがあるということを自然に受け止められるようになっていた。

⑦ カマキリが産まれちゃった

2020年1月下旬

12月から虫かごに入れていたカマキリの卵から、カマキリが産まれていることに保育士が気づく。子ども達に知らせると、驚きと喜びの声があがり、すぐに観察が始まり、その勢いに見入っている。4歳児もすぐに聞きつけ集まってきた。

「まだ冬なのに」「部屋があったかすぎたんだよ」と5歳児が相談を始めた。

「卵を移動させなきゃ」「寒いところがいいよ」「トイレがいいんじゃない？」「トイレはそんなに寒くないよ」「冷蔵庫は？」「そこは寒すぎる、赤ちゃん凍っちゃう」「扇風機をつけて、その下にずっと置いたらいいんじゃない？」「虫は外で暮らしているから、外がいいかも」と、子ども達は口ぐちに自分の考えを皆に伝えた。その後、子ども達が相談し、残りの卵を外のテラスにおくことにした。

5歳児Tが図鑑で調べ、赤ちゃんカマキリがアブラムシを食べることを4歳児にも知らせる。早速4、5歳児がのっばらへ出て、カマキリの赤ちゃんのためのアブラムシ探しが始まった。

4 歳児 2 人が落ち葉の裏に斑点がついているのを見つける。「これ、アブラムシかな。フンか？」と言いながら、5 歳児 A のもとへと持っていった。A が顕微鏡を持ち出し、ピントを合わせると皆でのぞきこんだ。黒い斑点が、顕微鏡のデジタル画面に大きく映し出されると「足がある、動いてる。これ、アブラムシだ」と喜ぶ姿がある。黒い斑点とデジタルを交互に見ながら、「これ、絶対絶対アブラムシだ」と喜びすぐにカマキリの虫かごへと入れていた。



あ、アブラムシだ！

考察

園庭という身近な場所で年間を通してカマキリの生態を見ることができたのは貴重な体験であった。最初は扱い方が全く分からない状態であったが、のっばらで日常的にカマキリに触れ、大きさを測ったり図鑑で調べたりしながら理解を深めていった。そしてそれぞれの変化や生態に対しての驚きや期待を日々積み重ね、さらなる知りたい意欲や関心へと広がっていった。

カマキリの変化や卵を見守る事例にもあるように、子ども達は観察力とその継続にさらに磨きをかけ、分からないことや予想外の生き物の生態に対して、子ども同士で意見を出す姿が見られるようになった。また、共通の場所であるのっばらにいつもカマキリがいたことで、お互いに聞きあったりする姿が見られ、自然に異年齢児のかかわりを築くことができた。

4. 関心から探求心の芽生えへ

5 歳児クラスになると、子ども達は初めて捕まえた虫やフン、見つけた自然物について、すぐに顕微鏡で見たり、図鑑などで調べるようになった。それはさらなる関心へとつながり、新しいことを知る面白さを十分に感じるできるようになった。

この 5 歳児の事例を以下にまとめた。

事例 イモムシの不思議 5 歳児

① 何のイモムシか調べよう（2019年7月）

春から次第にのっばらにも様々な種類の虫が来るようになり、子ども達は初めて見る虫を見つけては捕まえて図鑑で調べて遊んでいた。ある日、園長が家の庭にいたイモムシをクラスに持ってくると興味津々で、早速図鑑で調べ始めた。



そして、シモフリスズメガの幼虫を見つけ、「このチョウチョじゃない？頭のとんがりや背中の模様が似ている」と指さした。「これどんな虫になるのか見てみたい」との声があがり、飼ってみることにする。

② イモムシの餌を探そう

まずはこのイモムシが何を食べるのか考えた。イモムシがどこにいたのか園長に尋ねると、オリーブの葉についていたとのことであった。KとHが園長に「オリーブの葉っぱを持ってきてほしい」と頼みに行く。園長が「どれくらい必要か」尋ねると、子ども達は「いっぱいウンチをするから、すごい食べると思う」としばらく悩み、フンの量＝食べる量だと考えた。そして、フンの量を調べればどれくらいオリーブの葉が必要か分かるのではないかと気づいた。そして、KとHは園庭に戻ってくると「何個フンが出たか数えてノートを作る」と期待に満ちた表情を見せ、自分でイモムシのノートを作成した。そして「今日はこれだけ出た」と報告するようになった。そこへ、虫や植物に詳しい保育士から、園庭にあるみかんの葉も食べるのではないかという話を聞く。その話を聞いてミカンの葉を園庭でとり、虫かごにセットしてみる。次の日の朝クラスへ行くとイモムシを見ていたKが「先生、ミカンの葉っぱ食べているよ！ミカンの葉っぱでもいいみたい」と声をかけてくる。その日から、園庭へ出るたびにミカンの葉を入れたり、フンの掃除をすることが日課となった。



③ どこまで大きくなるんだろう

毎日世話をしている中でHが「これどこまででっかくなるんだろう」とつぶやく。翌日が子ども自身の身体測定だったこともあり、このイモムシも一緒に身体測定してみようことを提案する。「イモムシも身長はかるの？体重も？自分たちと同じやつで測るの？」と期待を膨らませている様子であった。身体測定はいつも看護師が行っているの、その経緯を看護師に伝え、子ども達と一緒にイモムシの身体測定もやってもらえないかと相談する。

すると看護師も活動に参加することになった。

イモムシの身長、頭位、胸囲はメジャーで測り、体重は調味料の計量器を使って計測した。子ども達は看護師が測る姿をじっと見つめていた。そして「次また測ってもらおう！」と嬉しそうに話していた。



9グラムだ



どれくらいの重さかな？

④ どこでガになるの？

子ども達はイモムシの身体の色が茶色っぽくなってきてサナギになる準備を始めた様子に気づき、もう一度図鑑のシモフリスズメガのところを読んだ。すると、土の中でサナギになるという記載があるのを見つけた。それを見て、「早く土入れてあげないと！」と子ども達がのっぺらの土を虫かごに敷き詰めて、イモムシを土の上に置いてみた。するとすごい勢いでイモムシが土の中に潜っていった。それを見たKは「ずっと土入れてくれるのを待っていたんだね」と話す。土の中に潜ってから毎日のように「もうサナギになったかな？」と気にして虫かごをのぞいていた。

土に潜って 1 週間ほどたち、子ども達と土の中のイモムシの様子を見てみることにする。子ども達と虫かごを紙の上に慎重にひっくり返してみるとサナギに変化していた。子ども達は驚きと喜びの声をあげ、しばらく観察した後サナギの硬さに疑問を持った。Aが葉っぱでサナギをつつくと、縮んだり伸びたりと動いた。まさか動くと思っておらず、「うわ、動いた」「気持ち悪い!」と悲鳴をあげて驚きながらも嬉しそうな表情を見せた。関心は続き、虫かごにサナギを戻してから、何度も揺らしたりしてサナギの体が収縮する様子を見ていた。



土の中に潜ってく、潜ってく!

⑤ 出てきた!

サナギになって何日かがたち、子ども達は毎日のように虫かごをのぞいてガになって出てくるのを楽しみにしていた。ある日、部屋に戻ってくると「先生!出てきている!」と大きな声が聞こえ、サナギからシモフリスズメガが出てきていた。「やっぱり図鑑で見たやつだったね」「でっかい」とそれぞれ感想を言っていた。Kは「ちゃんと飛べるかなあ」と言いながら、ガになった姿をじっと見つめていた。しばらく虫かごの中を観察していると、ガが飛び始めた。その様子を見て「もう外に出たいんだね、逃がそう」と子ども達が相談し、逃がすことにする。蓋を開けると、ガは少しずつ距離を伸ばしながら飛んでいった。子ども達は、シモフリスズメガが見えなくなるまでずっと後ろから追いかけて、飛んでいく様子を見届けていた。

考察

年長児になると、色の変化や大きさの変化などを観察しながら、何を食べさせるか、サナギになるには何が必要かと、興味を持ったことを友だちと一緒に調べて考え、試すことを繰り返した。知ったことを試してみようと行動に移すとき、子ども達の表情は生き生きとしていた。そんな子ども達の様子を見て、担任以外の保育士や、看護師、用務職員などもより関心を持つようになり、自分が持っている虫の知識や技術を使って子ども達と関心を共有しようとする関わりも見られるようになった。

自然や生き物はそれぞれの個体のペースで生き、変化していく。その過程は一度として同じものではないため、貴重な経験となった。子ども達はその時々思いがけないイモムシの生態に出会い、その度に好奇心を湧かせた。

5. 興味と関心の継続

生き物を通した子ども同士の自然な触れ合いや観察による直接体験を、継続的に子ども達と進めている事例がある。今年で3年目になるカブトムシの飼育である。カブトムシは都会の子ども達にとっては王様のような存在であり、子ども達の嬉々とした姿に、その飼育は保護者の関心も集めた。

以下は、その事例である。

カブトムシの飼育

経過：1年目 2018年10月 4・5歳児クラス

秋のバス遠足先の公園で、偶然朽木の切り株を見つけた。「何かいるかもしれない」と子ども達が掘ってみると、12匹の大きな幼虫が出てきた。その幼虫の大きさに「これは絶対にカブトムシの幼虫だ」と喜び、「保育園に連れて帰って飼いたい」という声があがった。そこで、保育園へ連れて帰り、子ども達と一緒に2つの衣装ケースに幼虫を分けて飼うことになった。子ども達が時々「幼虫は元気かな」と土を掘り返しては、幼虫の様子を気にかける姿があった。

経過：2年目 2019年6月～2020年3月 0歳児クラス～5歳児クラス

春になり、12匹すべてが成虫になった。12匹を衣装ケースや虫かごへ小分けし、保護者も見られるようエントランスに置く。子ども達は、朝はカブトムシにあいさつがてら声をかけ、日中は手に出して触れ合い、夕方は親子でじっくりと観察する姿が見られるようになった。また、毎日カブトムシと触れ合う子ども達を見て、保護者や地域の方が何十匹もカブトムシを寄付してくれた。

観察① 卵が産まれた 2019年9月 5歳児クラス

子ども達が衣装ケースの中に白い粒を見つける。「これ、卵だ！」とすぐに子ども達が気づく。そばに孵化した小さな幼虫がいることにも気づいた。子ども達と卵を数えてみると、174個見つかった。この卵と幼虫を全部飼いたい子ども達の気持ちを受け、どうやって飼育をしていくかを職員間で相談する。そして、昨年成功した衣装ケースでの飼育と、子ども達にとって身近で、さらに自然に近い形で育てる園庭での屋外飼育の二本立てで、子ども達と飼育してみることにした。そこで、園庭に落ち葉溜めの木枠を作り、散歩先で子ども達と拾った落ち葉などを入れていった。



観察② ウンチにくさくないね 2019年 11月 5歳児クラス

時々子ども達が掘り返し、幼虫が元気かを確認した。「いた！うわあ、でっかい！」と一人が見つけると、他の子ども達も落ち葉溜めに頭を突込み、掘っては探し、幼虫を見つけている。Sが幼虫を手をしていると、幼虫のお尻から黒いものが出てきてフンをした。「みてみて、ウンチしてる！すごいでっかい」と保育士に見せるが、床にフンが落ちた。Sが慌ててティッシュでフンをつかむと「ぜんぜん臭くない」と言う。他の子も嗅いでみて「ほんとだ、臭くない。土みたいなにおいがする」と言うと、Sが「落ち葉食べてるからだよ」と答えた。



経過：3年目 2020年6月

1歳児クラス～5歳児クラス

コロナ禍で4、5月は、ほとんど子ども達はいなかったが、6月になり、少しずつ登園してくるようになった。腐葉土の中の幼虫は、サナギになるものも出てきた。その時、保護者からオアシスで人工蛹室を作ってサナギを育てる方法を聞き、土の中にいるサナギがどのように成虫になるのか、子ども達と一緒に観察したいと考え、試してみることにした。

幼児クラスと1歳児クラスで合計7匹（1匹は幼虫）の観察をする。

観察① これがカブトムシになるの？ 2020年6月 4歳児クラス

保育士が衣装ケースからサナギを取り出して見せたが、昨年3歳児クラスでカブトムシの幼虫と成虫しか見ていなかった子ども達は、実物のサナギを見てもカブトムシとつながっていない様子であった。そこで保育士がカブトムシの図鑑を用意すると、それを見て初めて「このサナギがあのカブトムシになるんだ」と分かり、「えーっ！すごい！」と驚きと期待の声があがった。早速子ども達が「たんじろう」「ぷりん」と名前をつけ、観察が始まった。ある日Nが「先生見て。たんじろうの色が黒くなってきたんだよ。もう少しでカブトムシになると思う」と真剣に見ている。そしてケースを揺らしサナギが体をくねらせると「今日も元気みたい」と嬉しそうに言う。



観察② 脱皮が始まった

2020年7月 4歳児クラス

朝、サナギがくねくねと動きながら茶色い皮を脱ぎ始めた。子ども達も虫かごの前で釘づけになる。カブトムシの名前を呼びながら「がんばれー！」と応援する姿があった。脱皮にはかなりの時間を要し、子ども達はしばらくするとサナギから離れ、また戻ることを繰り返している。Sはひとときも離れずにじっと観察を続けている。「足はもう全部終わった、あと半分だ」とサナギに声をかけるようにつぶやいていた。Rが「どうなった？」と様子を見に戻ってくる。



サナギがくねくねと動いては止まり、動いては止まりながら脱皮をしている様子を見ると、「こいつ、すごいな！」と大きな声で言う。脱皮は午後まで続いたが、急にぴくりともせず、全く動かなくなった。子ども達は「休憩が長いね」と言いながら見ていた。

観察③ 埋めてあげよう

2020年7月（1週間後） 4歳児クラス

サナギが動かなくなっても、子ども達の意見は二つに分かれた。Aは「もう全然動かないから死んじゃったんだよ」と言い、数人が同意したが、ほとんどの子ども達は「まだ半分皮を脱いでいる途中だから死んでいないよ、休憩しているんだよ」と反論した。意見は割れたまま1週間が過ぎた。そこで、担任が「サナギは1週間動いてないから死んでしまったと思う」と話をする。そして、「カブトムシは頑張ったんだけど、虫にとっては脱皮をすることはすごく難しいことなんだよね」と話をし、園庭に埋めることを提案すると、じっと聞き納得した。そして、子ども達と一緒に園庭に埋めに行く。

Cが「最後に触りたい」と言い、他の子ども達も羽や角を触ってみる。「おしりの方はブニョブニョしている」「角はかたい」など言いながら、最後に「ばいばい」と声をかけていた。

考察

カブトムシを継続的に観察し、3年目に人工蛹室にチャレンジしたことで、子どもも保育士も生き物の生命について考えるよい機会となった。今回、人工蛹室から完全変態できたのは、7匹中2匹のみだった。また、自然の蛹室を探すときに土を掘り起こしたせいか、今年は奇形成虫も多く産まれてしまった。それでも、各クラスにカブトムシがいて、子ども達と触れ合っている。次の卵を産むためにメスが土の中に潜っていると、「今、大事な時だから」と虫かごをそっと持つ姿も見られている。子ども達は、幼虫やサナギ、成虫に触れるなかで、年齢なりに生命の不思議さや命のサイクルを感じ取っている。この実体験は、単発的なものではなく、これから長年に渡って子ども達に経験してほしいことがつまっていると再認識できた。

6. まとめ

子ども達と一緒に「のっばら」に種を蒔き、野草を植えることから始めた「のっばらプロジェクト」の取り組みの結果、年間を通じて野草は80種以上、昆虫類50種以上が園庭に集まった。日常的に自然や生き物と親しむ体験によって、子ども達は単に収集することから、生き物への期待や、愛着を持つようになり、生き物の生態へと関心が広がっていった。子どもと自然とのかかわり方は年齢によって関心やその継続性などに違いはあった。しかし、共通して言えるのは、子ども達が実際の生命に出会い、好奇心を湧かせ、自分で触れてみた驚きや喜びが、小さな科学の芽となって「もっと知りたい」「じっくり見たい」という観察意欲へとつながっていったことである。そしてそこには、子ども達と同じ目線で感動し、一人ひとりの思いや姿を丁寧に読み取りながら、言葉かけ、必要な物や、やり方について子どもの考えを引き出し、提案をしていく保育士の存在が不可欠であった。保育士が子ども達の中に湧き起こる好奇心や疑問に寄り添い見守っていくことで、子ども達は年齢なりに推測をたて、試していく。その経験が積み重なって、実態の伴う知識となっていた。そしてさらに、異年齢の子ども同士がクラスの垣根を越えて「のっばら」で出会い、やりとりをすることで、共同の学びへとつながった。特に、4、5歳児は、生命の不思議さや自然の摂理に触れる経験を通して、自分の意見を出し合い、友だちの意見を共有しあうことで、小さな生き物の生命に思いを馳せる心、さらなる探求心も育んでいった。

7. 今後の課題と方向性

「のっばらプロジェクト」の取り組みを通して、子どもの育ちを保育士がどう感じ、どうかかわったかを職員間で共有できたことで、保育士の視点の広がりへとつながり、自園の「のっばら」が子ども達の発達にとって、非常に重要な場所として位置づけられた。公立保育園である自園は、職員の定期的な人事異動があるが、そのなかでこの「のっばら」を自園の特徴として維持していくことは大きな課題である。今年度は、コロナ禍で散歩へ出かけられず、また天候不良で野草の伸びが悪いことで虫が集まりにくい現状がある。それでも子ども達はアブラムシが産まれる様子を顕微鏡で見えて驚き、アリの卵の発見に喜びの声をあげている。その年によって「のっばら」の状況は変わるが、子ども達が五感を使って自然と関わる姿に保育士が寄り添っていく視点を大切にし、そこから見えた学びを毎年職員間で共有していくことが子どもの「科学する心」を広げていく助けになるはずである。さらに、野草の生育や生き物の生態の知識を職員間で共有し、引き継ぎ、「のっばら」が常に子ども達の日常にあるようにするということも重要だろう。

また、保護者の理解や関心も欠かすことができない。今回の取り組みでは、子どもが夢中になっている生き物の展示をしたり、「のっばらグラム」の更新や「のっばらだより」の発信を続けることで、保護者もこの取り組みを詳しく知り、それをきっかけに親子の会話の広がりや自然への関心にもつながっていった。なかには虫を提供してくれたり、虫の情報を教えてくれる保護者もいて、このプロジェクトを通じてさらに保護者との距離が近くなり、保育園の活動の理解へとつながった。

今後も、保護者と共に子どもの育ちを見守っていく関係を築いていきたい。

おわりに

今回の取り組みで感じたことは、自然には職員も思わず夢中になってしまう力があつたということである。子ども達は、保育園の職員の誰にでも共感してもらっている安心感の中で、日々の気づきや疑問を気軽に話しながら共有することができた。

今後も子ども達が出会う出来事の中で生じる様々な感情に職員も心を躍らせ、子ども達の学び、気づきを受け止めたい。そしてそれを発信することで、保護者も含めた園全体で、自然を通して育まれる子ども達の「科学の芽」を共有していきたい。

あとがき ～ 保育士の視点から ～

世田谷の真ん中に位置するこの地にも地元産のバッタがやって来る。春が過ぎ暖かくなると園庭の周りに職員が作った自然保護区にバッタが見られるようになった。オンブバッタとショウリョウバッタだ。毎日、手が届く身近さで数多く見られるバッタは、虫好きな子ども達にとって絶好のお宝だ。そっと近寄り、素早く掌で包み込む。つぶさないように握ったその掌に確かな感触を感じながら、少しずつ指を広げていく。子どもの目が一点に集中し輝きだす瞬間だ。逃がさないようにバッタの背中をつかみ、じっと見つめる。その目は曇りなく優しい。毎日のようにバッタに出会えることで、子ども達の中でバッタは決して珍しい存在ではなくなっていく。そのことが良い作用をもたらし、心は躍動していても穏やかに触れ合えるゆとりを生む。事実、この一年で園庭にやってきたバッタの中のボス的存在だった7センチのショウリョウバッタは毎日のように捕まえられ、あちこちと連れまわされながらも、「じゃあね、またね」と捕まえられた場所にまた返されていく。あんなに夢中に連れまわしているのに「やだ、逃がしたくない」と言わない子ども達の姿に驚く。逃がしたらもう二度と会えないかもしれないのに。さらに、あんなに連れまわされているのに逃げることなくまた翌日も園庭にいるその大きなバッタにも驚かされる。不思議ではあるが、それだけイネ科の植物やシソなど、バッタを呼ぶために散歩先で摘んでは植えたり、種を蒔いて増やしたりしてきたおいしい餌がたくさんあって居心地が良かったということなのだろう。バッタたちに、自分たちが整えてきたこの環境が認めてもらえたようで嬉しい。

子ども達が日々優しく関わりながら、たくさんの刺激をもらっているこのバッタ達を、ぜひ保護者にも知ってほしい、子ども達と一緒に見てほしい、共感してほしいという思いで、園の入り口であるエントランスの棚の上で虫かごに入れたオンブバッタを展示することにした。夏の間、しばらくカブトムシが展示されていたその場所に、新たに置かれたバッタは瞬く間に注目の的となる。虫好きの子が虫かご前に陣取り熱い眼差しを向けていると、その保護者も自然とそこに目を向ける。

「こんな間近にバッタを見るのは初めてかも」「カブトムシは苦手だけど、バッタなら見られる」「何か身体の色が違うのがいるね」

身近な自然を改めて目の前にして、子どもと一緒に大人もそれぞれに思いを口にしていく。いい時間だ。そんなバッタ達も秋が深まるころには次々と天命を終えていく。今までありがたい思いを込めて子ども達と土に返していく。のっぴらに穴を掘り、「ありがとね、またね」と言いながら土をかけてお別れをする。まだ命について考えることもほとんどないだろう子ども達だが、生きるものはいつかその命を終える、死ぬということを、バッタたちを通して確かに見て実感していく。密かにとても大切なことを教えてくれたバッタに感謝である。

研究代表者・執筆者

研究代表者：城内明美

執筆者：蔵石律子、田中里美、山崎佑子、小林通子、加藤宏昌、兼行絢子、松崎哲哉、後藤文子

